

みなと 今・むかし新聞

第 10 号

平成 21 年 3 月

港区は、伝説の宝庫

昭和三十九年の東京オリンピック開催に向けて港区は、大きく変貌いたしました。道路の新設・拡幅や路面電車の廃止、地下鉄網の整備等、大変に便利なまちになりました。

でも、このような便利なまちに大勢の方が住み始めたのもつい百五十年くらい前の話です。

それまでは、武家屋敷や寺院・神社が数多くあり、人通りもまばらでした。「辻斬り」も横行した地域もあったそうです。今も区民のオアシスとして利用している「白金自然教育園」を始め、「旧芝離宮恩賜庭園」「有栖川宮記念公園」等は、武家屋敷内にあった庭園です。

昭和六十年の頃、区民の皆様から地域に残されている「伝説」の聞き取り調査を実施しました。そのとき収集した「伝説」の一部をご紹介します。

「愛宕一丁目の綿のばば様」

愛宕山の下にあります「伝叟院（でんそういん）」というお寺の参道に、「綿のばば様」といわれているお地蔵様がありました。

江戸時代、このあたりは武家屋敷やお寺がたくさん集まっておりました。「綿のばば様」のお顔は、頬がこけ、病気にかかっているようで、弱々しく見えます。でも、いつもあたまには、真新しい「綿」を被っておりました。

この「綿のばば様」には、次のような話が残されています。



昔、おばあさんは、お嫁さんと折り合いが悪く、いつも喧嘩ばかりしていました。なんとか、おばあさんは、お嫁さんと仲良くしようと思いましたが、駄目でした。

ある冬の日でした。おばあさんは、重い病気に罹ってしまいました。せきもひどく、高い熱にうなされる日々が続きました。最初、お嫁さんは、あまり看病をしませんでしたが、途中からこれまでのことは忘れ熱心に面倒を見ました。でも程なくしておばあさんは息を引き取りました。お嫁さんはこのことを深く嘆き、「お地蔵様」をこの地に建立し大切にしました。毎日、線香を手向け、病気で苦しむ人を助けてあげるように祈願しました。

以来、このお地蔵様は、「綿のばば様」と言われるようになりました。人々は、このお地蔵様に願掛けし、願いがかなうとお礼にお地蔵様の頭に「綿」を載せたそうです。

でも、このお地蔵様は、この前の戦争で焼けてしまい、今はありません。

「油の井（いど）」

江戸のころ、源助横丁（現在の新橋四丁目付近）に

ありました屋敷内の井戸のお話です。いつのころか分りませんが、その井戸の水は、いつも赤くにごっていて飲む事ができません。そこで家の人は、その井戸を「油の井」と呼んでおりました。

あるとき、「油の井」を掃除をしておきますと、底のほうに、キラツと光るものが目にうつりました。

「あれ、何だろう」と掃除の人は手を休め、身を乗り出してじつと見ておりました。それから、底をさらいますと「カチン」という音がしました。そこで、ゆつくりと引き上げますと、なんと「弁財天」の像だったのです。掃除の人はびっくりして家主に連絡しました。

「それは、大変なことだ」家主は、腕を組み、じつと考えてました。

「よし、この弁才天の像は、近くの神社に奉納しよう」と考え、お納めしました。それから、屋敷内にあった「油の井」の水は清らかになり、飲む事ができるようになったそうです。以来、この井戸を「弁財天の井」として大切にしたいとすることです。

「狸穴の狸そば」

むかし、古川に架かる狸橋（白金五丁目付近）の近くに「そば屋」さんがあったそうです。その店にこどもを背負い手拭いをかぶったおかみさんに蕎麦を売ったところ、貰ったお金が翌朝になると「木の葉」になっていたという話です。また一説では、「そば屋」さんの主人が、大奥を荒らしまわっていた「狸」

が討ち取られたことをかわいそうに思い、この地にきちんと狸を葬ったからとも言われています。

この話は、「麻布七不思議」の一つになっています。

（清田 和美）

区内あちこち

青山霊園

街歩きが好きで、どこへでも、と言いながら墓地は敬遠していた。遊び気分で見学入るのには憚（はば）られるし、本心チョット気味悪がっていたからだ。

それが生涯学習センターの区内散歩に参加したら青山霊園に立ち寄るコースで、とうとう足を踏み入れることになった。

ここは公共墓地として、明治七年に利用が始まったそうだが、大名家屋敷跡地の名残りで大きな木も沢山あり、約八万坪の園内は一万四千基の墓、十二万人が静かに眠るにふさわしい佇（たたず）まいが保たれている。



梅の花が満開の青山墓地

しかも全体的な印象は思いのほか明るくサッパリしたものであり、案内所には「園内歴史散歩マップ」までが用意されており、アツサリ不安が消しとんでしまった。

マップを片手に歩を進めると、教科書やテレビドラマでお馴染みな人達の墓が並んでいる。「大久保利通」「吉田茂」「志賀直哉」そのほかにも各界を代表するような著名な人達である。（とても一日や二日で見学は無理だ）

墓前に立ち手を合わせたら、すっかり錆ついている脳ミソが、ほんの少し動いた気がしたが。それはともかく刺激を受けるキッカケがここにはまだまだありそうで、また来なくなる場所となった。（武 恒雄）

「学校訪問」 その四

◎ 赤羽小学校 平成二十年十月二十三日

赤羽小学校訪問は二回目。対象は三年生。

今回のテーマは盛り沢山。昔、おやつはどんなものを食べていたか。カステラの間に餡をサンドイッチにしたシベリアというもの。昔の電気器具はどんな物があったか。二又ソケット。炭火アイロン、電気暖房機が無いので布団の足元に湯たんぽを入れ、朝にはそのお湯を洗面器にかけて顔を洗った。

将来何に成りたかったか。男の子はほとんど全員軍人さん、女の子は看護婦、学校の先生など色々。

年をとって困ることはとの質問に、物忘れ、目が良く見えなくなる、耳が良く聞こえない。歩行が困難などと答える。会員の一人が今日も老眼鏡と補聴器を忘れて来てしまい困っていると話す。

するめイカを持参し、その食べ方を伝授。池でザリガニを捕った話などもする。

最後に昔の遊びの色々を実際にやって見せる。剣玉、ベーゴマ、昔とった杵柄とは云うものの、もう何十年もやっていないので勝手が違う。でも三つのお手玉をやってみせた時は、皆、賞賛の眼差し。

最後に全員が合唱で、感謝の気持ちを表してくれる。感激。

◎ 神応小学校 平成二十年十二月九日

神応小学校訪問は二回目。対象は一、二年生。

今回のテーマは「昔の正月の遊び」

あやとりで熊手（箒）を教える。一年生にはちよつと難しいようだった。ほかにお手玉、双六など。続いて一、二年生合同で場所を講堂に移して行う。広いスペースが取れたので、羽根つき、ゴムなわとび、竹トンボなどが新登場。なかでもゴムなわとびが大人気で長蛇の列。ゲームでいつも親指しか使っていない子供が多いだけに、たまには、身体全体を使った遊びをしたくなるのかも。

再会を約束して終了。

今日のようなとき、我々も童心に帰って、遊ばれているような錯覚に陥ることもある。

（中嶋 弘）

昔と今を語る

『私の芝浦』 その二

昭和二十年八月十五日敗戦後、疎開先から帰ると、芝浦三丁目から四丁目は焼け野原。芝浦小学校は現在港区スポーツセンターが建っている場所に平屋の校舎が建てられて授業をしました。午前と午後に分けられての二部授業でした。

現在の田町駅寄りの小学校がある場所は当時原っぱで、学校帰りに四つ葉のクローバーを探したり道草をして帰りました。

一時期、南海小学校（現在三田図書館がある場所にあった）の教室を借りていたことがあり、そこで私は勉強した記憶があります。一クラスが五十人ほどで、教室が狭く感じられました。

中学は芝浜中学でしたが、当時は独立校舎もなく、神明小学校や都立芝商業学校の教室を借りての授業で、入学してから卒業するまでずっと居候でした。

現在はこの学校も冷暖房完備、立派な校舎で勉強していますが、別にうらやましいとは思いません。私の子供時代は空襲で家は焼かれ、貧乏でしたが、焼け跡には自然が溢れていて、走り回って遊びました。勉強部屋はもちろん有りませんでした、食卓としてのちゃぶ台の上で勉強し、誰か家族がいつもそばに居ました。

当時は東京湾の水質も良く、芝浦では海苔の養殖、加工が盛んで海岸沿いの道端には海苔を干す「すだれ」が並んでいました。香り豊かなおいしい浅草海苔の味は忘れられません。この海苔の生産も高度経済成長による海の汚染で昭和三十七年終結しました。

また、東京湾で釣り上げられたハゼの天ぷらは軽くておいしかったです。沢山漁獲のあった時は、七輪で焼色を付け串に刺し寒風に当てからからに干して甘露煮にしたり、ごぼうと共に昆布巻きの芯にしたものでした。

戦後の復興が進むと共に、便利で豊かな生活を手に入れた代償として、安全で素朴な味も失われて行きました。

（高橋 邦子）

「空襲で家を焼かれて」

昭和20年3月南桜国民学校を卒業し4月から中学1年生となり田村町2丁目に母と二人で住み電車で赤坂まで通学しておりました。3月に集団疎開から帰つてすぐの3月10日に「東京大空襲」があり一晩中、東の空が真っ赤でしたがこの日は新橋から田村町界限は焼夷弾も落ちず無事でした。

住んでいた家は電車通り（日比谷通り）沿いで木造3階建て、1階が店舗2階が住居3階が住み込み店員用でした（現太陽日酸の所）。この辺は2ないし3階建ての店舗兼用住宅が多く、道の東側は家具屋が多い街でした。歩道には防空壕が掘られ、各戸が家の前に防火水槽を置いていました。

5月23日夜空襲がありました。空襲が激しくなったので逃げようということになり、リヤカーを引いて母とたまたま泊まっていた伯父と三人で日比谷公園まで逃げました。でも翌朝、帰ってみると家は焼けないで残っていました。しかし、電車通りの反対側は全部焼落ちていて、新橋駅が家からまる見えになりました。

それもつかの間の5月25日夜またしても空襲です。空襲警報が鳴るとすぐ敵機B29が姿を現しこちらに向っています。遠くに逃げる暇ありません。母と私はすぐ斜め前で焼けてがらんどうになったビルに逃げ込みました。今の八州電気ビルです。

ザアーという音と共に焼夷弾が落ち、2ブロック西の八百屋が一瞬にして赤黄色の炎に包まれました。私はビルのなかに伏せていたのですが、顔をあげてその瞬間を見ました。更にザアーという音が続き、焼夷弾が次々落ちてきました。目の前の道路で鋭い金属音が生きて、油脂の火炎が道路一面に広がりました。防空壕に突き刺さったら中の人は全滅だったでしょう。私もビルから出ていたら命がなかったかも知れません。焼けビルは私の命を守ってくれました。戦場のようでした。

八百屋の火災はたちまち近所に広がりました。消火活動などまったくなしで燃えるにまかせてました。消防車のサイレンが聞こえたので消してくれるのかと思つたら素通りでした。宮城が火災になったとかで前を通過して行きました。我が家が焼けたのは真夜中、最

後のほうでした。目の前でめらめらと燃え落ちました。防火水槽など何の役にも立ちませんでした。幸いにも店が持っていた南佐久間町の倉庫が焼け残りました。店から2百メートル位の西のところです。住む所ではありませんでしたが、雨風を避けられれば大満足でそこに住みました。今の法曹ビルの所です。

学校に翌日行きました。体育館が焼け落ちていました。ひどかったのは赤坂見附の駅から学校への道の両側で死体がごろごろしてました。学校では焼け跡整理はありましたが、勉強はちゃんと続けていました。英語の授業もあったんですよ。勉強しながら考えていたことは軍人になりたいの一心。伯父はシンガポール作戦に参加し南方にいました。隣の薬屋の兄さんは海軍でした。近くのクリーニング屋の兄さんはあこがれの航空兵でした。私も早く戦争に参加したい。今は負けてはいるが勝てないことはない。神風が吹くことを信じてました。

やがて8月、終戦です。9月に占領軍が現れ国道の両側を銃を抱えて歩き、真ん中を多くのジープがやって来て日比谷の方へ進むのを私は沿道にいて歯をくいしばってただ眺めておりました。

（加藤 満男）

生涯学習センター通信

昨年のNHK大河ドラマ「天璋院篤姫」は、稀に見る高い視聴率でした。歴史上の人物としてあまり知られておりませんでした。幕末から明治にかけて、日本の夜明けに大きく影響を与えた女性として高く評価されるようになりました。

生涯学習センターでは、安政三年十一月薩摩藩・渋谷屋敷から六本木・飯倉・虎の門・新橋と通過して内幸町の薩摩藩・桜田屋敷までの「婚礼ルート」を、二回に分けて歩きました。

生涯学習センターでは、語り部の学習会を二階の「さくらだ記念室」で毎月、第二・第四水曜日の午後二時から開催しております。生まれ育った港区の話をお聞かせ下さい。関心ある方々の参加をお待ちしております。

（K）

問い合わせ 03・3431・1606
発行 平成二十一年三月二十日
港区立生涯学習センター